

反復 ART 不成功例に対する多血小板血漿子宮内投与法の有用性の検討

山田悠太¹, 大垣彩¹, 水野里志¹, 辻勲¹, 福田愛作¹, 森本義晴²

¹医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック ²医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】生殖補助医療では、胚移植周期に PRP を子宮内腔へ投与することで着床環境が改善し、妊娠率向上につながることが報告されている。当院では 2021 年 3 月より子宮内 PRP 療法を導入しており、反復 ART 不成功例に対する有用性を後方視的に検討した。

【方法】2021 年 3 月～2026 年 7 月に子宮内 PRP 療法後に凍結融解胚盤胞移植を施行した反復 ART 不成功例 35 症例を対象とした。自己血から調製した PRP を原則月経周期 12 日目および 14 日目に子宮内腔へ投与した。

- ① 患者背景を評価した。
- ② 臨床妊娠率を算出した。さらに、前回移植から PRP 施行周期までに着床関連検査・治療の追加がない 23 症例では、前回移植周期との臨床妊娠率を比較した。
- ③ 子宮内膜肥厚を目的とした 5 症例 7 周期では、移植時子宮内膜厚を過去の移植周期と比較した。

【成績】

- ① 平均年齢は 37.3 ± 5.1 歳、平均移植回数は 5.5 ± 2.8 回であった。対象のうち 91.4% (32/35) は、着床関連検査・治療および PGT-A を実施済みであるにもかかわらず妊娠に至らない難治症例であった。
- ② 症例あたりの臨床妊娠率は 40.0% (14/35) であった。同一背景下で比較した 23 症例では、PRP 施行周期の臨床妊娠率は 43.5% (10/23) で、前回移植周期の 4.4% (1/23) と比較して有意に高かった。

- ③ 移植時子宮内膜厚は PRP 施行周期 8.3 ± 0.8 mm、過去の移植周期 8.9 ± 1.0 mm で、有意差を認めなかった。

【結論】子宮内 PRP 療法は、着床関連検査・治療や PGT-A を実施しても妊娠に至らない反復 ART 不成功例において、臨床妊娠率向上に寄与する可能性が示唆された。一方、子宮内膜厚の増加は認められず、その作用は子宮内膜肥厚ではなく、サイトカインや増殖因子による着床環境改善を介する可能性が考えられた。今後は症例数を蓄積し、有効性や適応症例の検討が必要である。